

平成29年度 第1回インクルーシブ教育（支援児包容教育）委員会 議事録

□開催日時：平成29年6月28日（水）14：30～

□開催場所：駅北庁舎4階災害対策本部室

□出席者（敬称略）

- ・委員：宇野宏幸 中野正大 柴田勇夫 廣瀬和信 田口明 奥田紳二
坂田俊広 丹羽紀一 西村育子 則武里香 市川友博 水野恵美子
高木貴代子 若林恭子 瀬瀬育恵
- ・事務局：渡邊教育長 鈴木副教育長 木股次長 安田孔美 小栗妙子
景山裕子

1 あいさつ

教育長あいさつ

2 自己紹介

3 委員長 副委員長選出

4 （1）多治見市のインクルーシブ教育に対する期待

① 委員意見

- ・個人の力量によって「壁を」を下げることで学校生活を送りやすくする。
- ・多治見市のインクルーシブ教育は進んでいる。多治見市から発信していくことで東濃圏域の特別支援教育が進んでいく。
- ・高等学校との連携を図る場をつくってほしい。高校でも発達障がい生徒への対応が課題となっている。
- ・高等学校との連携の場を早い段階でもつとよい。
- ・障がいに対する理解が色々な方に広がっていくとよい。
- ・一生懸命やっているけれどできないことの苦しみを理解してほしい。
- ・市内の学校においてユニバーサルデザインの授業づくりを進めていくとよい。
- ・発達障がいのある子の周辺の子の理解をつくることも大切。
- ・教員全てが一人一人に応じて接していく力をつけていく必要がある。
- ・児童生徒のつまずきへの支援の例を広げていくとよい。
- ・早期支援が進んでいる。支援をどう引き継いでいくかが課題。
- ・スマイルブックの引継ぎ、巡回相談等、スムーズな移行ができるようになってきている。
- ・保育園でも「支援計画」を作成し、保護者にも理解していただきながら連携を取ることを進めている。連携が大切。
- ・当事者本人の目線でみることに心がけている。児童精神科医の佐々木正美先生の言葉「熱心で不理解な人が支援を必要としている人を苦しめる。」を自分に問いかける。

- ・一人一人の感じ方、思い方、個性を認め合える社会になるとよい。
- ・インクルーシブ教育の取組は素晴らしい取組である。感謝をしたい。
- ・神奈川県的事件など、まだまだ障害者権利条約に掲げられていることが状況ではない。
- ・障がいをもっている人に生きる力がどれぐらいついていくかということを心配している。障がいの思い方も「自分で生きる」という実感をもてるようになってほしい。
- ・発達障がいのお子さんと言っても、いろいろなタイプの方がいる。様々な原因がある。クラスの中にもいろいろなタイプのお子さんがある。子どもたちへの正しい理解が必要。
- ・文部科学省は「できるだけ同じ場で子どもたちが学ぶことをめざしていきましょう。」と言っている。「できるだけ」と付けているところが意味深である。クラスでいろいろなお子さんが学んでいることが前提となる。それぞれのお子さんが尊重される学校が求められる。
- ・「同じ場」という言葉にこだわらなくてもよい。一人一人の学び方に合った「学びの場」を選択できるようになる。柔軟に保護者と合意形成を図って「学びの場」を考えるとよい。

（２）平成２９年度の推進計画について

① 事務局説明

- ・「新教育基本計画」の策定について
- ・平成２９年度発達障がいに関する教職員等の理解啓発・専門性向上事業について

（３）プランの進捗状況

① 平成２８年度の個別の教育支援教育作成状況について 事務局報告

（委員意見）

- ・「個別の教育支援計画」を作成すると、関係者、役割を整理するためによい。
- ・園では、療育センターに通っている保護者とは合意形成が図りやすい。
- ・「個別の教育支援計画」を作ることで保護者や子どもの思いを伝えることができる。
- ・保護者の困り感、子どもの困り感、関係者の困り感が一致すると作成が進む。
- ・入試制度で合理的配慮が申請できる。根拠となるのが「個別の教育支援計画」となる。このことについて教師が理解し取り組む必要がある。事務局がその知識を入れていく必要がある。
- ・「個別の教育支援計画」を作成するメリットを明確にするとよい。
- ・作成が進まない理由を明確にする必要がある。

② 平成２９年度第１回巡回相談の実施状況 事務局報告

(委員意見)

- ・巡回相談で提出する資料の書式を決めるとよい。

③ 平成２９年度第１回特別支援教育コーディネーター研修会、リーダー研修会について 事務局報告

(委員意見)

- ・宇野委員よりリーダー研修会について今年度の研修計画について説明

④ 「特別支援教育の視点を踏まえた学校経営構築研究開発事業」について
陶都中学校 丹羽教諭より報告

(委員意見)

- ・医師として巡回相談で学校の様子を見ることは治療の参考になる。
普段の授業の様子を動画で見たことは子どもの姿がよく分かる。
学校と医療が連携していくことはよい。
- ・生徒の実態を把握して個別の教育支援計画を作成する、そのノウハウを報告してもらえると勉強になる。
- ・中野先生に巡回相談をしていただけるといことで医療との連携がかなり強力となることが特徴。
- ・学校の教育がアクティブラーニングになっていくなど、発達障がいのあるお子さんが有意義に授業に参画していくことが求められている。
陶都中学校の取組は、全国的にも成果が役立つことも大きい。これからも頑張ってください。

５ 次回予定

１１月を予定している

６ 閉会のあいさつ 鈴木副教育長